

フランチエスコの話 イタリア

昔むかし、コルシカ島にあるさびしい山の中に、ひとりの男の人が住んでいました。男の人には、息子が十二人ありました。

あるとき、ひどい飢饉におそれました。男の人は、息子たちにいました。

「わしには、もうおまえたちに食べさせてやるパンがない。広い世界へ出て行つて、自分でかせいで何とか食べていてくれ」

すると、末っ子のフランチエスコが、泣きだしました。

「ぼくは、足が不自由なのに、どうやつて食べて行けばいいんでしょう」

父親は、

「兄さんたちがおまえを助けてくれるよ。パンひと切れ手でもに入つたら、きっとおまえにも分けてくれるさ」といいました。

あくる日、十二人の兄弟は、おたがいに決して離れないと約束して、旅に出ました。ところが、二、三日すると、一番上の兄さんが、弟たちにいました。

「小さいフランチエスコはどうもじやまだなあ。この子はここに置いていこう。きっとなさけ深い旅人でも来て、助けてくれるだろうよ」

十一人の兄さんたちは、足の不自由なフランチエスコをそこに置き去りにしました。

十一人の兄弟は、会う人ごとに食べ物をめぐんでもらいながら旅を続け、やがて海岸に着きました。そこに、ボートがつないであつたので、兄弟は、そのボートを盗んで、向かいのサルニジア島へ渡ることにしました。ところが、海の真ん中まで来たとき、ひどい嵐が巻き起こりました。ボートは岩にぶつかつてくだけ、十一人の兄弟はみな、海にしづんでしました。

いっぽう、フランチエスコは、兄さんたちに置き去りにされて、悲しみと疲れとで、眠りこんでしまいました。すると、このあたりにすんでいる妖精があらわれて、このあわれな子を救つてやろうと考えました。妖精は、フランチエスコが寝ているあいだに、まほうの草で足を治してやりました。そして、きたならしいおばあさんになつて、そばの薪の山の上に腰を下ろしました。

やがて、フランチエスコは、目を覚まして、足がすっかり治つているのに気づきました。ふと見ると、そばに、きたないおばあさんが、腰を下ろして休んでいました。

「おばあさん、ひよつとして、ここをえらいお医者さまでお通りになりましたか」と、

フランチエスコは、たずねました。

「どうしてだね、ぼうや」

「だつて、ぼくが寝てゐるあいだに、お医者さまがぼくの足を治してくれたんだもの。お礼をいいたいんだ」

「そうかい。じつはね、わたしがそのお医者なのさ。わたしはまほうの草を持つていて、その草であんたの足をこすつてあげたんだよ。それで、すぐに治つたのさ」

フランチエスコは、うれしさのあまり、何とお礼をいつていいか分かりませんでした。おばあさんの首に飛びついて、力いっぱい抱きしめました。そのとたん、おばあさんは、これいじょう考えられないほど美しい娘になりました。体じゅう、金とダイヤモンドでぴかぴか光つていました。

フランチエスコは、すっかりおどろいて、娘の足もとにひざまづきました。娘はいました。

「お立ちなさい、フランチエスコ。わたしはこのクレノ湖の妖精です。あなたが恩知らずでないことが分かつてうれしいわ。だから、願い事をふたついてごらん。かなえてあげましょう」

フランチエスコは、ちょっとと考えてから、こういました。

「ぼくは、^{のぞ}望んだものが何でも飛びこむふくろがほしいな」

妖精は、

「もうひとつ願いごとは何ですか」といいました。

「ぼくのいうとおりのことをしてくれる杖がほしいな」

妖精は、^{つえ}フランチエスコにふくろと杖を渡して、^{ため}消えました。

フランチエスコは、さっそく、ふくろを試したくなりました。そこで、大きな声で、「鳥の丸焼きが、ふくろに飛びこむように!」といいました。たちまちいいにおいがして、ふくろの中に鳥の丸焼きが飛びこみました。フランチエスコは、大よろこびで、パンとワインも出しました。それから、お腹がいっぱいになると、歩きだしました。

旅を続けていくうちに、ある町に着きました。フランチエスコは、お金がなかつたので、

「十万ターラーが、ふくろに飛びこむように」といいました。そして、すてきな服を着て、りつぱな宿屋に泊りました。

ところで、その町は、国じゅうから腕利きのかけ事師が集まる町でした。あるとき、

悪魔が若い男のすがたでやつてきて、かけ事で勝つては、相手の魂たましいを買あいいました。かけ小屋の前には、かけに負けて財産ざいさんをなくし、絶望ぜつぼうした人たちのお墓はかが並びました。

悪魔は、フランチエスコに目をつけました。そして、フランチエスコの所にやつて来て、いいました。

「あなたはすばらしいかけ事師だと聞いています。ぜひあなたと勝負しょうぶがしたい」

フランチエスコは、

「ぼくは、かけ事なんかしませんよ」とことわりました。そのとき、悪魔がちゃんと隠かくしておかなかつたやぎの足が見えました。フランチエスコは、心の中で、

「ああ、悪魔がたずねて來たんだな。こいつはおもしろくなりそうだぞ」と思いました。二、三日すると、フランチエスコは、かけ小屋に行きました。でも、かけのやり方を知らなかつたので、お金をたくさん失いました。一日目も、三日目も同じでした。すると、あの悪魔が近づいて来て、

「もし希望のぞみなら、あなたをお助けしますよ。お金を貸してあげましょう」といいました。フランチエスコは、

「ぼくの魂を買い取るつもりだな。とつととこのふくろに飛びこめ」といいました。たちまち、悪魔は、ふくろの中に飛びこんでしまいました。フランチエスコは、杖に向かつて、

「さあ、ふくろを打うて」といいました。杖は、ふくろの上から、バンバン打ちました。悪魔は悲鳴ひめいをあげました。

「出してくれ！出してくれ！」

けれども、杖はいつまでも打ち続けます。

「出してくれ！死んでしまう！」

「死ぬはずないじやないか。おまえは悪魔なのに」と、フランチエスコは、笑いました。

三時間たつと、フランチエスコは、

「今日の分はこれで終わり」といいました。悪魔は、

「何をしたら、ここから出していくだけますか」ととききました。

「いいか、よく聞け。おまえのせいでかけに負けて死んでしまつた人たちを生き返らせるんだ。そして、二度とそんなことをしないと誓ちかうんだ」

「誓います！」

「それじゃあ、出でこい。でも、ぼくは、いつでもおまえをふくろにぶちこむことがで

きるつて、覚えておくんだよ」

悪魔は、約束して消えました。すぐに、お墓の中から、たくさんの人があらわれました。フランチエスコは、

「ぼくは、今日、みなさんを生き返らせることができました。でも、明日になればもうできないかもしません。だから、二度とかけ事なんかしないと誓つてくださいね」といつて、みんなに千ターラーずつお金をあげました。

「さあ、家に帰つて、パンのために働きなさい」

生き返つた人たち、よろこんで立ち去りました。

やがて、フランチエスコは、故郷のお父さんの所に帰ろうと思いました。

歩いていると、ひとりの少年が、座りこんで泣いていました。

「どうしたんだい」とたずねると、少年はいました。

「ぼくのおやじが、木から落ちて腕を折つてしまつたんだ。ぼくは、町へ走つて行つて、お医者に来てくれつて頼んだんだけど、お医者は、ぼくのうちが貧しいからつて、来てくれないんだ」

「心配するな。そのお医者は何で名前だい」

「ドクター・パンクラチオ」

「そうか。ドクター・パンクラチオ、ぼくのふくろに飛びこめ」

たちまち、お医者がふくろに飛びこんできました。フランチエスコは、杖に向かつて、「打て！」といいました。すると、杖は、ふくろを打ちはじめました。お医者は悲鳴をあげました。フランチエスコは、

「ドクター・パンクラチオ、ぼくがふくろから出してやつたら、この少年のお父さんを診てやると約束するかい」ととききました。

「はい、はい。約束します」

フランチエスコが、ふくろから出してやると、お医者は、さうそく少年の家に行つて父親の腕を診てやりました。

フランチエスコは、旅を続けました。

ようやく故郷に着くと、人びとは、まだ、ひどい飢饉に苦しんでいました。フランチエスコは、食堂を建てました。そこでは、人びとは、お金をはらわずに好きなものを食べるることができました。食堂は、飢饉が終わるまで続きました。

みなさんは、フランチエスコが幸運を手に入れて幸せだったと思うかもしません。

でも、そうではありませんでした。兄さんたちに会いたかったのです。フランチエスコは、兄さんたちをうらんでなんかいませんでした。

ある日、フランチエスコは、ふくろに向かっていいました。

「ジョバンニ、ぼくの兄さん、ぼくのふくろに飛びこめ」

すると、ふくろの中に、ぼろぼろになつた骨がひと山飛びこんで来ました。

「パウロ、ぼくの兄さん、ぼくのふくろに飛びこめ」

フランチエスコが、さけぶたびに、骨の山が飛びこみました。フランチエスコは、兄さんたちが死んでしまつたと分かって、たいそう悲みました。

やがて、お父さんが亡くなりました。フランチエスコも年をとりました。人生の最後の時間に、フランチエスコは、もう一度、あのクレノ湖の親切な妖精に会いたいと思いました。そこで、旅に出て、妖精に出会つた場所に行きました。

フランチエスコは、待ちました。けれども、妖精はあらわれませんでした。

「あの人にはうまでは、決して死ぬまい」と、フランチエスコは、思いました。

やがて、死神がやつて来ました。死神は、いっぽうの手に黒い旗^{はた}を持ち、もういっぽうの手にはするどい鎌^{かま}を持っていました。

「さて、フランチエスコよ。もうそろそろ人生にも飽きたのではないか。たくさんの山もかけ回つたし、たくさんの谷も越えただろう。そろそろ走るのをやめて、わたしといつしょに来ないか」

フランチエスコは、答えました。

「おお、死神よ。あなたに祝福あれ。たしかに、わたしは、もうじゅうぶん長いあいだ世の中を見て來た。けれども、あなたといつしょに行く前に、わたしは、自分にとつて大切なひとりの女人に、さよならをいわなければならぬんだ。あと一日、命^{いのち}をくれ」けれども、死神は、

「もういいだろう。お祈りを唱えて、わたしについておいで」といいました。

「お願ひだ、半日だけ待つてくれ」

「だめだ」

「一時間だけ」

「一秒もだめだ」

フランチエスコは、

「あなたがそんなに慈悲ならば、わたしのふくろに飛びこんでしまえ」とさけびまし

た。死神は、あつというまにふくろの中に飛びこみました。

そのとき、クレノ湖の妖精がすがたをあらわしました。妖精は、初めて会つたときとまつたく同じように若く、かがやくばかりでした。フランチエスコは、足もとにひれふしました。妖精はいいました。

「あなたは、わたしがあたえた力を、一度も間違つて使いませんでしたね。あなたが、ふくろと杖をよきことにしか使わなかつたので、ごほうびをあげましよう。何がほしいですか」

「あなたに会えた今、わたしには、何も望むものはありません」

「でも、あなたは、将軍しょうぐんになりたいのではありませんか。それとも、王さまになりたいですか」

「いえ、わたしには、何も望むものはないのです」

「でも、あなたは、富とみがほしいかもしない。それとも健康けんこうな体？ それとも青春せいしゅんがほしいありませんか」

「いいえ、わたしは、このコルシカ島の人びとが幸せで、戦いくさや飢饉で苦しまないようになということのほか、何も望むものはありません」

「では、その願いは、かなうでしょう」

妖精はそういつたを消しました。

フランチエスコは、大きなたき火をたいて、しばらくのあいだ、こわばつた体を暖めました。それから、死神をふくろから出してやつて、ふくろと杖を火の中に投げこみました。だれかが、悪いことに使わないようにと考えたのです。

そのとき、悪魔が、やぶのかげでくすぐす笑いました。でも、フランチエスコには、もう、その笑い声は聞こえませんでした。にわとりが、

コケコソコーと鳴きました。死神は、

「ああ、夜明けだ！」といつて、フランチエスコに鎌を当て、その亡骸なきがらをかかえて消えていきました。